



も起こる場
傷で、化学
起こります。

原因となる化学物質は多種多様で、化学物質そ

のものによる細胞の障害や、二次的に生じる発

熱作用などにより、皮膚の炎症や組織壊死など

が引き起こされます。工場や実験室での事故に

よるものが多い発生しますが、家庭でも化

学薬品(消毒剤、漂白剤、洗剤、錆落としな

ど)の誤使用などが原因となって発生する場合

があります。また、冬場は暖房器具の燃料な

どに使用する灯油を誤ってこぼして皮膚にか

かっけしまい、化学熱傷の状態となってしまう

こともあり、注意が必要です。

症状は、原因物質の種類、濃度、温度、接触

時間によって異なります。一般的には皮膚が赤

く腫れたり、水疱を生じたり、皮がむけたり、

皮膚の潰瘍・壊死など、熱傷(普通のやけど)

で見られるものと同様の症状が現れます。しか

し、熱傷よりも、時間とともに皮膚の深部へ進

行することが多いのが特徴です。

重症になりやすい低温やけど

低温やけど(低温熱傷)は、通常であればや

けどしない40～55度くらいの温度のものに

長時間、直接触れていたために起こるやけどの

症状です。冬期は電気毛布や電気あんか、湯た

んぼ、使い捨てカイロなどを直接皮膚に当てた

まま就寝してしまい、目が覚めた時には低温や

けどの状態になっていたというケースもあり、

注意が必要です。やけどを負ったばかりの時期

には軽い症状に見えても、時間が経過するにつ

れて皮膚の内部や皮下脂肪などが壊死し、重症

化してしまうこともあります。

予防のためには、原因になるものを長時間、

体の同じ場所に接触させないことが大切です。

就寝前に湯たんぽは布団から出し、電気毛布は

スリッパを切るようにしましょう。使い捨てカイ

ロは直接皮膚に触れないように、衣服の上か

ら使用します。また、季節を問わず、携帯電話

やゲーム機などを使用しながら眠ってしまい、

その機器から発する熱で低温やけどをするこ

ともあります。ベッドや布団の中でこれらの機

器を使用することは避け、スリッパを切っけか

ら寝る習慣をつけるようにしましょう。

やけどの応急手当てと治療

やけどの応急手当ては、水道水ですぐに冷や

す(やけどした部位を冷却する)ことが最も大

切です。体の部位、年齢にもよりますが、30

分～1時間を目安に冷やしましょう。やけどを

した人が冷やした状態の方が楽であると感じ

る場合は、それ以上の時間冷却してもよいで

しょう。冷やすことでやけどの進行を止め、痛

みも抑えることができます。注意したいのは、

冷やす前に慌てて衣服や靴下などを脱ごうと

すること、無理に脱ぐと熱の作用が持続して

より深いやけどになったり、水疱が破れ、痛み

が強くなることもあります。治るのに時間がか

ります。そのため、衣類の下で皮膚をやけどした

場合は、着用したまま冷却を行いましょう。

そして、早くやけどを治して傷跡を最低限に

するために、少しでも早く医師の診察を受け

ることが重要です。自己判断でまたまた家に

あった薬などをつけてしまうと、かえって悪化

することもあるので、医師の診察を受けるまで

は何もつけないようにしましょう。特に、植物

の葉や食品、油などを用いた民間療法を行うこ

とは避けた方がよいでしょう。

やけどの治療には、冷却、洗浄、軟膏治療な

どのによる保存的治療と植皮術を中心とした外

科的治療とがあり、やけどの深さや広さで適宜

治療法を選択します。II度熱傷でやけどの範囲

が皮膚全体の15%を超える場合や、III度熱傷

の範囲が全体の2%を超える場合は、原則とし

て入院治療となります。さらに広い範囲のやけ

どの場合は、命に関わることもあるため、直ち

に大きな総合病院で輸液治療と感染症の治療

を中心とした集中的な治療を受けることが必

要です。また、広範囲で深いやけどの場合、植

皮術などの外科的治療が必要となります。

【参考HP】

・公益社団法人日本皮膚科学会 (https://www.dermatol.or.jp/)

・一般社団法人 日本形成外科学会 (http://www.jsprs.or.jp/)

・消費者庁 (http://www.caa.go.jp/)